地 理 歴 史

Ⅰ 改 訂 の 要 点

小学校及び中学校の社会科における学習の成果に立脚して、世界史、日本史、地理それぞれの科目相互の関連を重視して内容構成を図っている。また、習得した知識、概念や技能を活用して課題を探究する学習を充実して、日本や世界の各時代及び各地域における風土、生活様式や文化、人々の生き方や考え方などを学び、それを通じて過去や異文化に対する理解、国際社会に主体的に生きる資質を培うとともに、言語に関する能力を育成するようにしている。そしてその際には、生徒の発達の段階や各科目の専門性・系統性に配慮するとともに、地図や年表をはじめとした様々な資料を活用した学習をより一層重視することとしている。

1　教科の目標

地理歴史科の目標は、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。」と示している。

従前の「国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として」は、今回の改定で「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として」と改められているが、意味は従前と同様である。

目標は、次の三つの部分から構成されている。第１の部分は主として歴史（世界史と日本史）の学習内容を示し、第２の部分は主として地理の学習内容を示したものである。第３の部分は「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。」であり、これは地理歴史科がその学習を通じて目指す最終的なねらいを示したものである。

2　科目の編成

地理歴史科は、従前と同様に、次の６科目をもって構成されている。

科　　目	標準単位数
世界史Ａ	2
世界史Ｂ	4
日本史Ａ	2
日本史Ｂ	4
地　理Ａ	2
地　理Ｂ	4

また、必履修科目は従前と同様に「世界史Ａ」及び「世界史Ｂ」のうちから１科目並びに「日本史Ａ」、「日本史Ｂ」、「地理Ａ」及び「地理Ｂ」のうちから１科目の合計２科目・４単位以上である。

３　各科目の目標と内容

「世界史Ａ」

①　目　標

近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「世界史Ａ」における改訂の要点は、主に次の４点である。

a　導入時期の学習における地理・日本史との関連付けと、中学校社会科との接続に配慮した内容構成

b　近現代の歴史を一層重視した内容構成

c　諸資料に基づく学習を重視した内容構成

d　主題を設定させ、探究する活動の充実

aについては、「(1)　世界史へのいざない」が新設され、自然環境と歴史及び日本の歴史と世界の歴史のつながりにかかわる主題を設定して学習させることで地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせるようにしている。

bについては、近現代史を一層重視し、三つの大項目のうちほぼ二つを近現代史の学習に充てることとしている。「(2)　世界の一体化と日本」では、前近代史を近現代世界を理解する前提として位置付け、16世紀以降の次第に一体化する世界の歴史を中心に扱うこととし、「(3)　地球社会と日本」では、現代世界の特質と展開過程を理解させるとともに、人類の課題を歴史的観点から考察させることとしている。

cについては、年表、地図その他の資料の積極的な活用を通して、世界の歴史を理解させることとし、資料の活用は、知識基盤社会と言われる今日の社会の構造変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等の育成とも密接にかかわるものであり、今日、その習得が期待される能力の一つであるとしている。

dについては、大項目の(3)の「オ　持続可能な社会への展望」で、生徒自らが主題を設定し、これまでに習得した世界史の知識、技能を用いながら、歴史的観点から諸資料を活用して主体的に考察する活動を通して歴史的思考力を培い、言語活動が充実するよう図られている。

「世界史Ｂ」

①　目　標

世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「世界史Ｂ」における改訂の要点は、主に次の３点である。

a　導入時期の学習における地理・日本史との関連付けと、中学校社会科との接続に配慮した内容構成

b　世界史の中での日本の位置付けに留意した内容構成

c　主題を設定して行う学習をすべての大項目に設定

ａについては、「(1)　世界史の扉」で、中学校社会科との円滑な接続を図り、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせることとしている。特に地理的条件との関連として、自然環境と人類のかかわりについての中項目「ア　自然環境と人類のつながり」を新設している。

ｂについては、大項目(4)の「ア　アジア諸地域の繁栄と日本」、大項目(5)の「エ　グローバル化した世界と日本」などのように、それぞれの時期での日本の動向を世界の歴史の中に明確に位置付けるように構成している。

ｃについては、大項目(1)から(5)までのすべての大項目に主題を設定して行う学習を置き、段階的・継続的に指導することで、歴史学習の基本的技能を習得させ、言語活動の充実を図ることとしている。

「日本史Ａ」

①　目　標

我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け、現代の諸課題に着目して考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「日本史Ａ」における改訂の要点は、主に次の２点である。

ａ　歴史を考察し表現する学習の重視

ｂ　近代の大観的な学習の重視と項目の再構成

ａについては、言語活動の充実や学習内容の確かな定着を図り、歴史学習にかかわる基本的な技能を高めて歴史的な見方や考え方を身に付けさせるように、諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習を重視することとしている。「(1)　私たちの時代と歴史」を、この科目の導入として新設し、次に適切な主題を設定して追究・探究し表現する学習を大項目(2)の「ウ　近代の追究」、大項目(3)の「ウ　現代からの探究」に設置している。「私たちの時代と歴史」、「近代の追究」、「現代からの探究」という一連の学習を計画的に行うことで、言語活動の充実や、導入とまとめの重視による学習内容のより深い理解と確かな定着を図り、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることとしている。

ｂについては、近代の歴史の展開を大きくとらえることができるように、項目を再構成している。従前では二つの大項目からなっていた近代を、内容の精選と項目の再構成により「(2)　近代の日本と世界」とし、その中を主に政治的考察を重視する中項目「ア　近代国家の形成と国際関係の推移」と、経済的な視点からの考察を重視する中項目「イ　近代産業の発展と両大戦をめぐる国際情勢」とで構成している。大項目(3)の中項目ア、イについても同様である。

「日本史Ｂ」

①　目　標

我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「日本史Ｂ」における改訂の要点は、主に次の３点である。

ａ　歴史を考察し表現する学習の重視

b　近現代の学習の重視と項目の再構成

c　歴史の総合的な考察の重視

aについては、言語活動の充実や学習内容の確かな定着を図り、歴史学習にかかわる基本的な技能を段階的に高めて歴史的な見方や考え方を身に付けさせるように、諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習を、通史的な学習内容とかかわらせて計画的に実施することとしている。大項目 (1)の「ア　歴史と資料」、大項目(2)の「ア　歴史の解釈」、大項目(3)の「ア　歴史の説明」、大項目(6)の「ウ　歴史の論述」という一連の学習を計画的に行うことで、歴史学習にかかわる基本的な技能を段階的に高め、これらの学習を通して、言語活動の充実や、導入とまとめの重視による学習内容のより深い理解と確かな定着を図り、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることとしている。

bについては、従前は３項目ずつだった「原始・古代」と「近世」の内容を、それぞれ２項目ずつに再構成し、近現代の学習を一層重視し、それ以前の歴史を大きな視点で捉えることで、伝統や文化についての認識を一層深めさせることとしている。

cについては、主に時間軸にかかわる各時代の特色及び変遷を総合的に考察することを一層重視することとしている。

「地理Ａ」

①　目　標

現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「地理Ａ」における改訂の要点は、主に次の５点である。

a　科目の目標の改訂

b　内容構成についての見直し

c　日常生活と関連付けた学習内容の重視

d　生活圏の地理的な諸課題を探究する地域調査の実践

e　地図を活用した学習の一層の重視

aについては、現代世界や生活圏の諸課題を地理的に考察するに際し、歴史的背景を踏まえた考察を重視することとしている。

bについては、「(1)　現代世界の特色と諸課題の地理的考察」という主に地球規模（グローバルスケール）の地理的事象や諸課題を扱う内容項目と、そのような学習を受けて「(2)　生活圏の諸課題の地理的考察」という主に生活圏などの地域規模（ローカルスケール）の地理的事象や諸課題を扱う内容項目について学習することとし、地球規模から地域規模に至る諸地域について、主に主題的な方法を基に学習できるよう項目構成を工夫している。なお、今回の改訂では、従前の学習指導要領で取り入れられていた項目間選択は廃止されている。

cについては、今回の改訂で「地理Ａ」と「地理Ｂ」の二つの科目の性格や内容の違いが明確にされ、「地理Ａ」では、身の回りにある地図を取り上げた学習や防災に関する学習など日常生活と結び付いた学習内容の充実が図られている。

dについては、この科目の最後に、それまでの学習成果を活用して、生活圏の地理的な諸課題をとらえ、その解決に向けた取組などについて探究する項目として位置付ける大項目(2)の「ウ　生活圏の地理的な諸課題と地域調査」を新設している。課題を探究する学習の中で地図を使用しながら事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論し

たりして、言語活動の充実を図ることとしている。

ｅについては、地図の読図や作図などの作業的、体験的な学習活動を伴う地図を活用した学習を一層重視することとし、「(1)　現代世界の特色と諸課題の地理的考察」と「(2)　生活圏の諸課題の地理的考察」のそれぞれの冒頭に地図に関する中項目を設け、その後に続く項目においても読図や作図の学習を行うことによって、地理的技能の習熟を図ることとしている。

「地理Ｂ」

①　目　標

現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

②　内　容

「地理Ｂ」における改訂の要点は、主に次の５点である。

ａ　科目の目標の改訂
ｂ　内容構成についての見直し
ｃ　現代世界の地誌学習の充実
ｄ　我が国の地理的な諸課題を探究する項目の新設
ｅ　地図を活用した学習の一層の重視

ａについては、現代世界の諸地域を地誌的に考察するに際し、歴史的背景を踏まえた考察を重視することとしている。

ｂについては、内容の初めに地図に関する基礎的・基本的な知識や技能を身に付ける「(1)　様々な地図と地理的技能」、現代世界の諸課題について大観する「(2)　現代世界の系統地理的考察」、それまでの学習成果を活用して現代世界の諸地域の特色や諸課題について学ぶ「(3)　現代世界の地誌的考察」の三つの大項目により内容を再構成している。なお、今回の改訂では、従前の学習指導要領で取り入れられていた項目間選択は廃止されている。

ｃについては、「地理Ａ」と「地理Ｂ」の二つの科目の性格や内容の違いが明確にされ、「地理Ｂ」では、様々な規模の地域を世界全体から偏りなく取り上げるなど地誌的な学習を充実して、より一層世界の地理的認識を深めることができるようにしている。

ｄについては、この科目の最後に、それまでの学習成果を活用して、我が国が抱える地理的な諸課題を探究し、その解決の方向性などについて展望する項目を大項目(3)の「ウ　現代世界と日本」として新設している。課題を探究する学習の中で地図を使用しながら事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりして、言語活動の充実を図ることとしている。

ｅについては、地図の読図や作図などの作業的、体験的な学習活動を伴う地図を活用した学習を一層重視することとし、「(1)　様々な地図と地理的技能」の冒頭に地図に関する内容を設け、「(2)　現代世界の系統地理的考察」と「(3)　現代世界の地誌的考察」の各項目においても読図や作図などの学習を行うことによって、内容全体を通して地理的技能の習熟を図ることとしている。

Ⅱ　実施上の留意点

問１　「世界史Ａ」において、新設された「(1)　世界史へのいざない」の内容構成の特質及び指導上配慮すべき点は何か。

「世界史へのいざない」は、導入時期の学習として、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせるために、今回の改訂で新設されている。地理との関連付けにあたる「ア　自然環境と歴史」、日本史との関連付けにあたる「イ　日本列島の中の世界史」の各項目で適切な主題を設定し、考察する活動を行こととし、アでは「地図や写真などを読み取る活動」を、イでは「年表や地図などに表す活動」を中心に指導することとしている。その際、中学校社会科の内容の連続性に配慮し、世界史学習の基本的技能に触れさせることが大切である。

また、この科目の導入的性格の内容であることを踏まえ、教師が主題を設定して考察の進め方を生徒に示しながら指導する工夫が求められている。実施に当たっては、中学校社会科での学習の繰り返しにならないように留意するとともに、その成果を有効に活用して指導することが大切である。

なお、アについては導入時に、イについては適切な時期に実施することに留意する必要がある。

問２　「世界史Ａ」において、大項目(3)の「オ　持続可能な社会への展望」の内容構成の特質及び指導上配慮すべき点は何か。

この中項目は、この科目のまとめとして位置付けられ、言語活動の充実に対応している。ここでの学習のねらいは、現代社会の特質や課題についての適切な主題を生徒に設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究する活動を通して、世界の人々が強調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させることである。主題を生徒に設定させる際には、持続可能な社会の実現のためには、環境の保全、経済の開発、社会の発展をそれぞれの調和の下に進めていく必要があることを留意させる必要がある。また、生徒の興味・関心や学校、地域の実態等に十分配慮し、教師の適切な助言の下に主題を設定させるなどの工夫が必要である。

指導に当たっては、各種の情報・資料の収集と、活用、論述、発表、討論など生徒の主体的な活動を積極的に取り入れる学習形態や指導方法を工夫するなどして、歴史的思考力を培うようにし、言語活動の充実を図るようにする。そのためには、探究のための適切な時間を確保するとともに、年間指導計画の中に位置付けて指導することが肝要である。

問３　「世界史Ｂ」において、「(1)　世界史への扉」の内容構成の特色及び指導上配慮すべき点は何か。

この大項目は地理との関連を重視した新設の中項目「ア　自然環境と人類のつながり」、従前の内容を受け継いだ「イ　日本の歴史と世界の歴史のかかわり」、「ウ　日常生活にみる世界の歴史」で構成されている。

従前はこれら中項目の中から適宜選択し二つ程度主題を設定するとしていたものを、今回の改訂では、三つの中項目からそれぞれ一つずつ選択し主題を設定することとなった。その際、アについては、世界史学習の導入として実施し、イとウについては適切な時期に実施するようになった。

主題の設定については、歴史を身近に感じたり、実感的にとらえたりできる事例を各中項目から一つないし二つ程度取り上げて、それらの事例をもとに主題を設定することとしている。また、主題の考察に当たっては、諸資料を積極的に活用するとともに、作業的、体験的な学習活動を適宜取り入れることによって、過去の出来事を時間を追って暗記するのではなく、歴史

に問いかけたり、自ら課題を発見したりして、学習に主体的に参加し、考察することの大切さに気付かせることが肝要である。特に、この大項目は「世界史Ｂ」の導入的性格の内容であることから、教師が主題を設定し、考察の過程を示しながら指導するなどの工夫が求められている。

問４　「世界史Ｂ」において、すべての大項目で主題を設定して行う学習が設定されているが、指導上配慮すべき点は何か。

「世界史Ｂ」での主題を設定して行う学習として、「(1)　世界史への扉」、大項目(2)の「エ　時間軸からみる諸地域世界」、大項目(3)の「エ　空間軸からみる諸地域世界」、大項目(4)の「オ　資料からよみとく世界の歴史」、大項目(5)の「オ　資料を活用して探究する地球世界の課題」の各項目が挙げられる。これらの学習の指導に当たっては、適切な時間を確保し、年間指導計画の中に位置付けて指導することが肝要である。

主題を設定して行う学習の中で、大項目(2)のエ、大項目(3)のエ、大項目(4)のオ、大項目(5)のオについては、時間軸、空間軸から整理し表現する技能、資料をよみとく技能、資料を活用して探求し表現する技能をそれぞれ取り上げ、段階的・継続的に指導することにより、歴史的思考力を培い、言語活動の充実を図るようにする。

特に大項目(5)のオについては、それまでの学習成果を踏まえ、生徒の主体的な学習を重視する観点から、各種の情報や資料の収集・選択・活用、調査や見学、報告や討論などの多様な学習活動を取り入れるようにし、探究のための十分な時間の確保と諸資料の整備に配慮することが必要である。

問５　「世界史Ａ」及び「世界史Ｂ」における近現代史の指導に当たって配慮すべき点は何か。

世界史Ａ、Ｂの両科目ともに、客観的かつ公正な資料に基づいて歴史の事実に関する理解を得させるようにすることが大切である。歴史的事象や資料の選択と解釈に当たっては、偏った立場からの取り扱いは避けるとともに、歴史学会などでも解釈の対立がある場合には、それぞれの立場の解釈をその根拠をなす資料とともに示すなど工夫する必要がある。そして、生徒自身が客観的、公正な目で歴史的事象や資料を取り扱えるよう指導において配慮する必要がある。

また、政治、経済、社会、宗教、生活など様々な観点から歴史的事象を取り上げ、近現代世界に対する多角的で柔軟な見方を養うことが大切であるが、特に、近現代世界を扱う際の観点として、宗教が新たに加えられていることに留意する必要がある。

問６　「日本史Ａ」及び「日本史Ｂ」における諸資料の活用について、どのような点に留意すればよいか。

平素の学習において、示された資料などの内容を無批判に受け入れるのでなく、自ら資料を収集・選択する力やそれを批判的に読み取って解釈し考察に生かす力、さらにその成果を年表や地図など自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けさせることが大切である。特に近現代の諸資料には、文献、地図、写真、映像、統計、グラフなどのほか、博物館や郷土資料館などにある諸資料、身の回りの生活文化や地域の文化財、地名などがあり、様々なものが歴史的資料となりうることに着目させ、それぞれの特性に気付かせたい。

また、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学なども取り入れ、地域の諸資料についての情報を十分に収集するとともに、それを活用した学習活動を指導計画に適切に位置付けることが大切である。

問７　「日本史Ａ」において、大項目「(1)　私たちの時代と歴史」、大項目(2)の「ウ　近代の追求」、(3)の「ウ　現代からの探求」の指導内容及び方法について、どのような点に留意すればよいか。

大項目「(1)　私たちの時代と歴史」は、この科目の導入として位置付けられ、今回の改定で新設された。近現代の歴史的事象と現在との結び付きを考察させる学習を通して、歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせることをねらいとしている。実施に当たって大切なことは、生徒に歴史の当事者としての意識を持たせることであり、そのためには、生徒の視点や生活感覚に即した疑問を示したり、見出させたりし、結論を一方的に急ぐのではなく、その解決に必要な方法や資料を探らせて、歴史を学ぶことの意義や必要性に気付かせることにある。その際、教師の方で扱う資料や事象を絞って対象を焦点化させ、生徒自身が疑問や課題に気付くような指導上の工夫が必要である。

大項目(2)の「ウ　近代の追究」は、近代にかかわる学習内容を踏まえて適切な時期に実施することとなっており、近代における政治や経済、国際環境、国民生活や文化の動向が相互に深くかかわっているという観点から、教師による例示や助言を踏まえながら、身近な生活文化や地域社会の変化などにかかわる出来事が政治や経済など国家レベルの歴史と深くかかわっていることを認識できるような、適切な主題を設定して追究し表現できるようにする必要がある。

大項目(3)の「ウ　現代からの探究」は、この科目のまとめとして位置付けられている。科目の導入「(1)　私たちの時代と歴史」で培った関心や課題意識を受けて、現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、生徒自らが自分の関心を踏まえた適切な主題を設定して探究し表現することができるようにする必要がある。

なお、指導計画の作成に当たっては、この歴史を考察し表現する学習を指導計画の中に明確に位置付け、導入・まとめとしての項目同士の位置付けや育てる技能の関係に留意して、計画的・継続的に実施することに留意する必要がある。

問８　「日本史Ａ」及び「日本史Ｂ」の学習において、導入とまとめを重視し、平素から課題解決的な学習を取り入れるには、どのような点に留意すればよいか。

各単元や単位時間の学習の導入過程で、生徒に明確な課題意識をもたせたり、まとめの過程で考察した成果を生徒自身の表現でまとめさせたりする活動を重ねることで、言語活動の充実とともに、学習内容のより深い理解及び基礎・基本として確かな定着を図ることができる。学習指導要領解説では、導入の過程で生徒に自覚させる学習課題の例として、次の６点が挙げられている。

①　どういうことか（事象の意味・内容）
②　いつから・どのようにしてそうなったのか（事象の起点・推移の過程）
③　何・だれがそうしたのか（事象の主体）
④　なぜそうなったのか（事象の背景、事象間の因果関係）
⑤　本当にそうだったのか・何によって分かるのか（事象の信憑性・論拠）
⑥　他の地域や時代とどういう違いがあるのか（事象の特殊性・普遍性）

問９　「日本史Ａ」及び「日本史Ｂ」における近現代史の指導に当たって配慮すべき点は何か。

近現代の学習の指導に当たっては、生徒に客観的かつ公正な資料に基づいて歴史の事実に関する理解を得させるようにするとともに、多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力を育

成することが大切である。

近現代においては、情報・資料が多量に存する反面、根本的で重要な資料が未発表であったり、機密とされていたり、人々の現実的利害や思想・価値観の対立が絡んでいたりして、歴史的判断の難しいものも少なくない。したがって、近現代の学習に当たっては、相違なる価値観や対立する立場の一方に偏しない客観性の高い資料に基づいて、事実の正確な理解に導くように留意し、史実の認識や評価に慎重を期する必要がある。その上で、多様な資料を用い、異なった考え方を紹介することによって、歴史的諸事象の背景や意味を様々な立場から考察することができる歴史的思考力を養うようにすることが重要である。

問10　「日本史Ｂ」において、大項目(1)の「ア　歴史と資料」の指導内容及び方法について、どのような点に留意すればよいか。

この中項目は、「日本史Ｂ」全体の導入として位置付けられている。ここでは、「様々な歴史資料の特性」に着目して、「資料に基づいて歴史が叙述されていること」などについての理解を図り、歴史に対する生徒の関心を高めるとともに、文化財を保護することの重要性に気付かせることをねらいとしている。歴史資料には様々なものがあり、文献資料、遺跡や遺物、絵画や地図、画像や映像、伝承や習俗、地名、言語など様々なものが歴史を考察するうえでの資料となり得ることに気付かせ、資料から過去の出来事や景観、生活、伝統や文化などを推察させる学習活動を通じて、歴史資料が果たす役割に気付かせ、歴史への関心を高めるようにすることが大切である。

問11　「日本史Ｂ」において、大項目(2)の「ア　歴史の解釈」、大項目(3)の「ア　歴史の説明」の指導内容及び方法について、どのような点に留意すればよいか。

大項目(2)の「ア　歴史の解釈」は、資料から導き出された歴史的事象の、歴史の展開における意味や意義を解釈する力を身に付けさせることをねらいとして、適切な学習課題を設けて実際に資料を活用し、歴史を考察する学習に取り組ませることとなっている。したがって、ある時代の政治を学習する際に、典拠となる日記や文書などの文献資料を読むことや、社会を考察する際に絵図や絵巻物、風俗画などの絵画資料の読み解きを行うなど、それぞれの資料的特性に留意させるとともに、そこから分かる歴史的事象が歴史の展開にどう位置付くのかを考察し解釈させることが大切である。

大項目(3)の「ア　歴史の説明」は、歴史的手法を通じて得られた複数の解釈について、それぞれの資料的な根拠や解釈上の論理を踏まえて考えを説明する力を身に付けさせることをねらいとしている。歴史は現在に視点を置く過去の出来事の分析や把握であり、その立場や考え方によって、同じ歴史的事象について異なる解釈が成立したり新しい解釈が生まれたりする。ある人物やある政策の評価が分かれたり一定の期間を経て転換したりするのは、歴史上の事実が変化したのではなく、歴史の解釈が変化したのである。このことを踏まえ、それぞれの解釈がどのような資料や事実を根拠にし、どのような論理で成り立っているのか、さらにどの解釈や歴史叙述がより妥当と考えられるのかなどについて、考えを説明できるようにさせることが大切である。

なお、「歴史の解釈」と「歴史の説明」は各時代の学習内容と関連させて、適切な時期に実施することとなっている。

問12　「地理Ａ」において、「(2)　生活圏の諸課題の地域的考察」の指導内容及び方法について、どのような点に留意すればよいか。

ここで言う「生活圏」とは、おおむね生徒の学校所在地を中心とする通学圏など日常生活圏の範囲を意味している。

中項目「ア　日常生活と結び付いた地図」では、生徒に読図や作図の技能を身に付けさせるだけでなく、地理情報を地図から読み取ったり、地理情報を地図化したりするなどの技能まで含めて生徒に獲得させることが大切であるとし、指導に当たっては、デジタル化された地理情報を分析する地理情報システム（ＧＩＳ）を取り入れて指導できるよう工夫することが望ましいとされている。なお、ＧＩＳを取り入れた学習を進めるに当たっては、情報科等と連携しながら進めるなどの工夫が必要である。

中項目「イ　自然環境と防災」では、年次の異なる地形図やハザードマップなどの主題図の読み取りを通して生徒が居住している地域の自然災害について理解を深め、防災意識を高めさせることが大切である。

中項目「ウ　生活圏の地理的な諸課題と地域調査」では、生活圏の課題を生徒自ら設定し、解決に向けた取り組みを探求する活動を通して、思考力・判断力・表現力を培うことが大切である。

この大項目の指導に当たっては、世界諸地域の生活・文化や地球的課題を考察したことを踏まえ身近な地域を改めて見直し課題を見いだすという、スケールを変えることによる考察を意識させて指導することが必要である。その際「歴史的背景を踏まえ」ることで、「地域性」という空間軸とともに時間軸という動的な視点からとらえることにも留意する必要がある。

また、作業的、体験的な学習など生徒の主体的な学習が授業の中に適切に位置付けられるように年間指導計画を作成することも重要である。

問13　「地理Ｂ」において、大項目「(3)現代世界の地誌的考察」の指導内容及び方法について、どのような点に留意すればよいか。

今回の改訂で、「様々な規模の地域を世界全体から偏りなく取り上げるようにすること」となり、改めて地誌学習が整理され、充実されることとなった。ただし、「偏りなく」は、全世界を隈なく取り上げて網羅的な知識を身に付けることではないことに留意する必要がある。

この大項目は、導入としての「ア　現代世界の地域区分」、中核としての「イ　現代世界の諸地域」、まとめとして我が国の地理的な諸課題を探究し、その解決の方向性などについて展望する項目として新設された「ウ　現代世界と日本」の３つの中項目で構成されている。

中項目アでは、地域に区分する方法、地域の概念、地域区分の意義を理解させ、その有用性に気付かせることが大切である。

中項目イでは、取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察する地誌（静態地誌的考察）、取り上げた地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察する地誌（動態地誌的考察）、対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察する（比較地誌的考察）の考察方法を用いて学習できるよう工夫が必要である。例えば、静態地誌的考察では、“西アジアとは、いったいどのようなところだろう”という問いを立て、西アジアの多様な事象を項目ごとに整理して考察させること、動態地誌的考察では、“なぜ、中国は急激な経済成長を遂げているのだろう”という問いを立て、経済成長にかかわり合う巨大な人口や都市や農村の変容などの事象と有機的に関連付けて考察させること、比較地誌的考察では、“カナダとオーストラリアは、いったいどのような相違点や共通点があるのだろう”という問いを立て、二つの国を比較して考察させることなどの方法が考えられる。

中項目ウでは、この科目のまとめとして、これまでの学習成果を基に、我が国が抱える地理的な諸課題から生徒自ら課題を設定して、その解決に向けて探究したことを文章化、地図化して報告させるといった活動を通して、思考力・判断力・表現力等をはぐくみ、言語活動の充実を図ることが大切であり、さらには社会に参画する資質や能力を育成することを視野に入れた指導が望まれる。